



エイジズムと高齢期の適応に関する社会心理学的研究―― 自己の将来像としての高齢者に対する偏見――

竹内, 真純

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7970号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007970>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏 名 竹内 真純
専 攻 人間発達専攻
指導教員氏名 片桐 恵子

論文題目(外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

エイジズムと高齢期の適応に関する社会心理学的研究
—— 自己の将来像としての高齢者に対する偏見 ——

論文要旨

【第Ⅰ部 理論編】

高齢者に対する偏見・差別を意味する「エイジズム」は、人種・性別に次ぐ第3のイズムとされる。エイジズムには、人種や性別と異なり「誰もがいずれ高齢者になる」という特徴がある。しかし、この特徴がエイジズムに与える影響を検討した研究はほとんどない。本研究では「自分がいずれなる」という特徴がエイジズムに与える影響を明らかにし、エイジズムとエイジングの関係を検討する。

第1章では、エイジズムの実態について論じた。まず、本研究におけるエイジズムを「高齢者や加齢プロセスに対する否定的な態度」と定めた。次に、社会におけるエイジズムの実態として、就労の場において高齢者の雇用制限や昇進・評価での差別、医療・介護の場においてベビー・トークや高齢者虐待などが見られること、心理学的研究では様々な測定方法でエイジズムの存在が確認されていることを述べた。

第2章では、エイジズムの発生を説明する様々な理論を、偏見一般に共通する説明、高齢者の身体的特徴に注目した説明、誰もがいずれ高齢者になるというエイジングに注目した説明の3つの観点から整理した。エイジングの観点からエイジズムを説明する理論は、存在脅威管理理論による説明(Martens, et al., 2004)と社会的アイデンティティ理論による説明(Tajfel & Turner, 1986; Packer & Chasteen, 2006)の2つが挙げられる。これらの理論は、存在脅威管理理論では死の脅威への対処として、社会的アイデンティティ理論では低地位集団に入るという脅威への対処として、自己と高齢者を差異化するためにエイジズムが生じると説明するものである。

第3章では、エイジズムが高齢期の適応に及ぼす影響について論じた。高齢期の適応に関する諸理論(Ryff, 1989; Baltes & Baltes, 1990など)は、加齢に伴って老いを受け入れることの重要性を示すが、エイジズムによって自己と高齢者を差異化し続けることで、そのような老いの受容が阻害される危険性がある。また、多くの先行研究から、エイジズムがRowe & Kahn (1987)の提唱したサクセスフル・エイジングの3つの要素(病気とそれに付随した障害が生じるリスクが

(氏名 竹内真純, No.2)

低いこと、認知・身体機能を維持すること、人生への積極的関与)、および高齢期の主観的幸福感の達成を阻害することが示された。これには2種類の阻害ルートがあり、1つは、周囲の持っているエイジズムが、高齢者差別やステレオタイプ脅威を通じて高齢者に悪影響を及ぼすという研究、もう1つは、高齢者本人が若い頃から持っていたエイジズムが、高齢期に自己成就予言となって本人の健康や行動に悪影響を及ぼすというステレオタイプ・エンボディメント理論(Levy, 2009)に基づく研究である。

第4章では、先行研究の限界を指摘し、本研究の目的について論じた。先行研究の限界として、以下の3点が挙げられた。第1に、「誰もがいずれ高齢者になる」ということがエイジズムの大きな特徴であるにも関わらず、この特徴がエイジズムに与える影響を検討した研究がほとんどないこと。第2に、加齢に伴って高齢期に近づくにつれて、エイジズムがどのような影響を受けるかが明らかになっていないこと。第3に、エイジズムが高齢期の適応に及ぼす影響を検討した研究は数多くあるが、Rowe & Kahn (1997)のサクセスフル・エイジングの3つの概念のうち「人生への積極的関与」の下位概念の1つである「生産的活動の維持」を検討した研究が行われていないこと。

そこで本研究では、以下の3点を目的とした研究を行った。

- (目的1) 自分がいずれ高齢者になると意識すること(以後「自己の高齢者化意識」)がエイジズムに与える影響を説明するモデルを構築する。
- (目的2) 目的1で作成したモデルを用いて、実際の年齢によるエイジズムの変化を説明する。
- (目的3) ステレオタイプ・エンボディメント理論に基づき、エイジズムが高齢者の生産的な社会参加に与える影響を検討する。

【第Ⅱ部 実証編】

第5章では、(目的1) 自己の高齢者化意識がエイジズムに与える影響を説明するモデルを構築する。初めに、存在脅威管理理論・社会的アイデンティティ理論に加え、自己欺瞞研究(Robinson & Ryff, 1999)、視点取得研究(Batson et al., 1997)等の先行研究に基づき、仮説モデルを設定した。このモデルは、自己の高齢者化が意識されたとき、それが脅威になる場合には自己と高齢者の差異化が生じてエイジズムが強まり、脅威にならない場合には自己と高齢者の同化が生じてエイジズムが弱まると予測するものである。

この仮説モデルを検証するため、大学生を対象とした研究1～3を行った。これらの研究では、大学生が高齢者になった自己を想像することで自己の高齢者化意識が生じると想定し、これがエイジズムに与える影響を検討した。

研究1では、自己の将来として高齢者を想像した場合と、他者として高齢者を想像した場合で、想像される内容が異なるかを質的分析によって明らかにするとともに、これらの課題の後に高齢者に対する態度や自己と高齢者の差異認知を測定し、課題による差を調べた。その結果、大学生の想像する高齢者は概ねポジティブなものであること、自己の高齢期の場合には活動的で対人関係の豊かな姿が、他者としての高齢者の場合には非活動的な姿が最も多くイメージされることがわかった。さらに、自己の高齢期を想像した後では、自己と高齢者を差異化している

(注) 3,000～6,000字(1,000～2,000語)でまとめること。

（氏名 竹内真純 ，No.3 ）

人ほど高齢者に対する態度が否定的であることが示された。しかし、自己の高齢期を想像するという操作だけでは、高齢者に対する態度は影響を受けないことが示され、自己の高齢者化意識によって高齢者に対する態度が肯定的／否定的になるのは、個人差や状況要因の影響が大きいことが示唆された。

研究2-1では、状況要因として、若者・高齢者の年齢カテゴリを操作し、「若者」「高齢者」の年齢カテゴリが顕現化しているときと、「若者・高齢者」を含む上位カテゴリが顕現化しているときで、自己の高齢者化意識がエイジズムに与える影響が異なるかを検討した。その結果、若者・高齢者を含む上位カテゴリ（日本人）が顕現化しているとき、自己の高齢者化を意識することでエイジズム（加齢不安）が弱まることが示された。

研究2-2では、高齢者イメージを操作し、ポジティブな高齢者の写真が提示されたときと、ネガティブな高齢者の写真が提示されたときで、自己の高齢者化意識がエイジズムに与える影響が異なるかを検討した。その結果、ポジティブな高齢者イメージが提示されたときは、自己の高齢者化を意識することで自己と高齢者の差異認知が小さくなり、高齢者に対する態度が肯定的になるのに対し、ネガティブな高齢者イメージが提示されたときは、自己の高齢者化意識によって自己と高齢者の差異認知が大きくなり、高齢者に対する態度が否定的になった。これは、高齢者になることが脅威になる（=ネガティブ）場合には、自己の高齢者化意識によって自己と高齢者の差異化が生じてエイジズムが強まり、脅威にならない（=ポジティブ）場合には、自己の高齢者化意識によって自己と高齢者の同化が生じてエイジズムが弱まることを示す結果であり、仮説モデルは支持された。

研究3では、存在脅威管理理論の研究パラダイムに則り、死の脅威を操作した場合に、自己の高齢者化意識がエイジズムに与える影響が異なるかを検討した。その結果、死の脅威が高まっているとき、自己の高齢者化を意識することでエイジズムが弱まることが示された。この際、自己と高齢者の差異認知には影響がなかった。これは仮説モデルに反する結果であった。この結果は、死の脅威への防衛として、エイジズムを強めるのではなく、高齢者をポジティブに見るという対処が行われたためだと解釈できた。

以上の研究結果に基づき、仮説モデルを修正した「自己の高齢者化意識のエイジズムへの方略的影響モデル」を提案した。このモデルでは、仮説モデルで想定していた自己と高齢者の同化／差異化のパスに加え、脅威への対処としてエイジズムを減少させる「高齢者のポジティブ化」のパスを追加した。さらに、脅威への対処として「自己と高齢者の差異化」と「高齢者のポジティブ化」のどちらの方略がとられるかをバランス理論（Heider, 1958）によって説明した。自己の高齢者化意識によって脅威が生じた場合、自分・高齢者・脅威の3者の関係がバランス状態になるよう、かつ、自己と脅威の間を離すような形で、最も変化させやすいものを変化させるというモデルである。これによって、研究1～3の結果を理論的に説明するモデルが作成できた。

第6章では、（目的2）第5章で構築したモデルが実際の加齢にも当てはまることを検証するため、研究4～6を行った。「自分が高齢者になる」という意識は、大学生が高齢者になった自分を想像するという実験状況だけでなく、実際に加齢に伴って高齢者に近づいていくときにも生じると考えられる。そこで、実際の年齢によるエイジズムの変化を、モデルにおける「自己の（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

（氏名 竹内真純 ，No.4 ）

高齢者化意識」の概念枠組みで説明できると考えた。

研究4では、モデルにおける自己と高齢者の同化と差異化のパスを検証した。30～64歳の中年を対象としたランダムサンプリング調査を行い、中年集団同一視が強い人は年齢が高いほど加齢不安が強いのに対し、中年集団同一視が弱い人は年齢が高いほど加齢不安が弱いこと、加齢不安が強いほどが高齢者に対する態度が否定的であることを示した。これは、中年集団同一視が強い人は高齢期に近いほど脅威を感じてエイジズムを強めるのに対し、中年集団同一視が弱い人は高齢期が近くても脅威を感じず、将来の自己としてエイジズムを弱めることを示す結果であり、モデルは支持された。さらに、女性、結婚している人、就労している人、内的統制意識の強い人、年功序列や上下関係を重視する人ほど中年集団同一視が強いことを明らかにした。

研究5では、同モデルにおける高齢者のポジティブ化のパスを検証した。存在脅威管理理論の実験パラダイムに則り、20代～60代の社会人大学生を対象に実験を行った。その結果、年齢が高い人（研究5-1）・高齢期に近いと認知している人（研究5-2）は、死の脅威に対して加齢不安を低下させたり（研究5-1）、高齢者イメージをポジティブにする（研究5-2）ことを明らかにした。これは、高齢期になる年齢が近く、自己と高齢者を差異化するのが困難な人は、死の脅威に対して、エイジズムを強めるのではなく、高齢者のポジティブ化によって対処することを示す結果であり、モデルは支持された。

研究6では、バランス理論による脅威への対処方略の説明を検証した。35～74歳を対象としたランダムサンプリング調査を行い、老いに対する脅威とエイジズム（60歳以上の高年労働者に対する態度）の関係が年齢によって異なるかを検討した。その結果、全体としては自己と高齢者の差異化欲求が強いほどエイジズムが強くなるのに対し、60歳をまたぐ境界年齢（55-64歳）においてのみ、この相関関係が見られないことが示された。この結果は、高齢期にさしかかる境界年齢においてのみ、脅威に対して高齢者のポジティブ化の方略がとられることを示すものであり、モデルを支持する結果である。

第7章では、（目的3）エイジズムが高齢者の生産的な社会参加に与える影響を検討した。研究7として、60歳以上の高齢者を対象とした長期的な縦断調査「全国高齢者パネル調査」データを二次分析した。二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから〔「老研ーミシガン大学 全国高齢者パネル調査＜Wave1(1987), Wave2(1990), Wave3(1993)＞＜Wave6(2002)＞」（東京都健康長寿医療センター研究所）〕の個票データの提供を受けた。分析の結果、調査開始時に老いに対するネガティブな態度を持っていた人ほど6年後の社会参加が少ないこと、6年後の身体機能に媒介されて15年後の社会参加が少ないことを明らかにした。

【第Ⅲ部 総合考察】

本研究は、自分が高齢者になるというエイジングの特徴がエイジズムに与える影響を明らかにし、モデル化した初めての研究である。また、高齢者になった自分を想像するという実験的状况と、実際の加齢によって高齢者に近づく状況が、同一のモデルで説明し得ることを示した。さらに、これまで別々の文脈で行われてきたエイジズム研究とエイジング研究を結び付け、エ（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

（氏名 竹内真純 ，No.5 ）

イジングの特徴がエイジズムに影響を与えるとともに、エイジズムがサクセスフル・エイジングに影響を与える相互関係を示した。これらは、他の偏見とは異なるエイジズムの特性を理解する上で重要な理論的貢献である。

また、本研究からは、エイジズムが社会・個人の努力によって低減し得ることが示された。本研究の知見に基づき、エイジズムを低減させるための方法として、①地域や趣味の集団等の多様な年齢層を含む上位カテゴリを顕現化すること、②メディア等を通してポジティブな高齢者イメージを提示すること、③中年集団への同一視を弱めるために、加齢に伴って統制できない部分を受け入れ、現在の地位や役割に固執しないこと、④老後にも続けられるような趣味を持つなど現在の生活と老後の生活の連続性をつくり、自己と高齢者の同化を促すこと、⑤サクセスフル・エイジングを実現し得る健康な生活や老後の備えにより、老いに対する脅威を減らすこと、を提案した。これらは本研究の社会的貢献と言える。

今後、個人の生活様式など、本研究で検討していない要素を取り入れたより幅広いモデルを作成し、エイジズムを減少させる具体的な介入方法を明らかにするとともに、本研究の知見が、自分がいずれなる可能性のある他の偏見・差別に一般化できるのか、検討することが望まれる。

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	竹内 真純		
論文題目	エイジズムと高齢期の適応に関する社会心理学的研究 － 自己の将来像としての高齢者に対する偏見 －		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	片桐 恵子 印
	副 査	教授	高見 和至 印
	副 査	教授	長ヶ原 誠 印
	副 査	准教授	増本 康平 印
	副 査	東京大学 客員教授	秋山 弘子 印
要 旨			
本審査委員会は、竹内真純氏から提出された博士論文について審査し、次のような結果を得たので報告する。 本研究は、エイジズムが生じる心理的メカニズムに着目し、第一に自己の高齢者化意識がエイジズムに与える影響を説明するモデルの構築、第二に考案したモデルを用いて実際の年齢によるエイジズムの変化を説明、第三にエイジズムが高齢者の生産的な社会参加に与える影響の検討を目的とした。この目的を達成するために、第1章から第4章にて先行研究を整理し、その後、第5章から第7章での実証研究を踏まえ、第8章において総合考察とともに提言を述べた。 第1章では研究の背景として、エイジズムの定義、社会におけるエイジズム、心理学的研究でのエイジズム、高齢化に伴う課題としてのエイジズムを取り上げ、エイジズムとして扱われる範囲、エイジズムのこれまでの測定方法、現実社会において立ち現れるエイジズムと問題点について整理した。 第2章では、エイジズムの発生を説明する理論として、第一に、偏見一般に共通する説明として接触仮説、欲求不満・攻撃説、現実的葛藤理論、第二に高齢者の身体的特徴に注目した説明として、存在脅威管理理論、社会的アイデンティティ理論のレビューを行い、存在脅威管理理論、社会的アイデンティティ理論の関係性について論じた。 第3章では、エイジズムから見た高齢期の適応への課題をとりあげ、ステレオタイプ・エンボディメント理論に基づき、周囲のみならず、高齢者自身のもつエイジズムがサクセスフルエイジングの実現を阻む要因となることを論じた。			

第4章では、先行研究の限界と問題点として、誰もがいずれ高齢者になるというエイジズムの特徴を直接的に検討した研究が殆どなく、加齢に伴うエイジズムの変化、エイジズムが高齢期の適応に及ぼす影響の研究が少ない点を指摘した。

第5章では存在脅威管理理論と社会的アイデンティティ理論を勘案・統合した「自己の高齢者化意識のエイジズムへの影響モデル」を提案し、研究1～研究3でそのモデルの検証を試みた。これらの研究の考察から、自己の高齢者化を意識したとき、1) 脅威にならないときは自己と高齢者の同化が生じエイジズムが緩和、2) 脅威になるときは自己と高齢者の差異化によるエイジズムの強化、ないしは高齢者のポジティブ化によるエイジズムの緩和が生じることが示唆された。高齢者のポジティブ化という新しい視座を提供し、バランス理論を用いてどの対応方略がとられるかを予測する修正モデルを提案した。

第6章では、幅広い年齢層を対象としたランダムサンプリングによる郵送調査を実施。加齢に伴うエイジズムの変化について、修正した「自己の高齢者化意識のエイジズムへの影響モデル」を検討した結果、加齢(年齢層による違い)に伴うエイジズムの違いに当てはまることを示した(研究4～研究6)。

第7章では研究7にて老いに対するネガティブなステレオタイプがもたらす影響について検討した。全国高齢者パネル調査を用いて、老いに対する態度が6年後、15年後の社会参加を妨げることを示した。

第8章では7つの研究から得られた結果を踏まえ、先行研究の抽象的な議論を脱し、自己の高齢者化意識のエイジズムへの方略的影響モデルを実証データを用いて検討し、他の偏見とは異なるエイジズムの特性を理解することの重要性、本モデルの他の偏見への一般化可能性について総合的な考察を展開した。

本研究では実際の高齢化の運命に直面したときの人々の心理的反応を実験によって模擬的に再現し、因果関係を解明することができることが示唆された。さらに、本研究からは加齢に伴うエイジズムの変化を明らかにすることで、エイジズムが社会・個人の努力によって低減し得る可能性を指摘し、具体的なエイジズムを減少させるための論拠と新たな視座を提示した。

以上を踏まえ、博士論文の5つの評価基準である、「独創性」「専門性および学術性」「実証性」「論理性」「先行研究・資料の適切・厳密な取り扱い」を充足していることが確認できた。

また、学位申請者は、筆頭著者として本論文に直接関わる下記のレフェリー付き学術論文2編を発表しており、博士学位申請に関わる参考論文等の要件を満たしている。

1. 竹内真純・片桐恵子(印刷中). エイジズム研究の動向とエイジング研究との関連:エイジズムからサクセスフル・エイジングへ.心理学評論,63(4).
2. 竹内真純・片桐恵子(印刷中). 自己の将来としての高齢者と他者としての高齢者の生活イメージの比較.神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,14(2).

本研究は、これまでのエイジズム研究を踏まえた上でそれを統合・発展させた新たな「自己の高齢者化意識のエイジズムへの方略的影響モデル」を提案し、実験、インタビュー調査、社会調査、縦断研究の既存データの二次分析を自在に組み合わせたミックスメソッドにより多面的に検証、エイジズムとその影響に関する理解について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の竹内真純は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。